

富士の民話 あれこれ

愛鷹山の天狗

昔、愛鷹山には、いろいろな天狗が住んでいたという事です。この天狗について、数々の昔話が言い伝えられています。
今回は、この愛鷹山の天狗のお話を紹介します。



愛鷹山系にある須津山神社の御神木

昔、愛鷹山には、たくさんさんのイノシシがいました。そして、冬になると里までおりてきて、農作物を食い荒らしていました。

ある日、村人たちは、大勢で山の奥までイノシシ狩りに行きました。ところが、イノシシを追いかけているうちに日は落ち、あたりは暗くなってしまいました。仕方なく村人たちは、山小屋で昼間とったイノシシを料理し、酒盛りを始めました。

鍋を火にかけていると、急にいろいろの火が吹き出し、鍋の肉がクタクタ音を立てて煮え始めました。みんなが不思議がっていると、小屋の戸が開き、ぬうつと大きな毛むくじやらの手が出てきました。

みんな、びっくりして小屋の隅でガタガタ震えていると、「おんにも、くりよう」と、とても人のものとは思えない声で言うのです。「おれにもイノシシの肉をくれ」と言っているのですが、恐ろしくて、だれも動けないでいると、一人の元気のいい若者が、鍋の中で煮えたぎっているイノシシの肉を、その大きな毛むくじやらの手に載せました。

すると、とても大きな声で「熱い」と叫んで、飛んでいってしまいました。この大きな声が山中にこだまし、しばらく静まりませんでした。やがて、もとの静かな山に戻ると、村人たちは「今のは天狗だな」と話し合いました。熱い肉を手を持った天狗は、これにこりて二度と山小屋付近に出なくなったということです。



愛鷹山

こちら編集室

昨年の暮れ、市民ミュージカル「ディアナ号」に出演した。ロシア人の艦長役として。歌、ダンス、芝居、そしてロシア語。すべて初体験のものばかりで、練習の毎日は充実していた。そして本番。ロゼシアター大ホールのステージには感動があった。

平凡な自分に訪れた非凡な経験。ほんの一步でさえ、みずから足を踏み出さなければ、何も始まらないし、何も得るものはないということ。また、多くの人との出会いは、貴重な財産となった。いつまでも大事にしていきたい。(ヤイツァ)

人口 232,470人
男 115,880人 女 116,590人
世帯 72,752世帯 (1月1日現在)
発行・編集 富士市総務部広報広聴課
富士市永田町1-100 ☎51-0123

